

各品詞の説明

〈自立語〉

① 動詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用して（＝単語の形が変わる）、単独で述語となる。

○動作、作用、存在を表し、**言い切ると原則「u段音で終わる」**。（「段音」については、教科書 p229 で確認すること）

例 泣く（カ行の u 段音）・思ふ（ハ行の u 段音）・走る（ラ行の u 段音） など

② 形容詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用して（＝単語の形が変わる）、単独で述語となる。

○状態・性質・感情を表し、**言い切ると「i（も）くは「j」で終わる」**。（口語（＝現代語）では「い」で言い切るもの）

例 うつくし（現 うつくしい）・寒し（現 寒い）・暗し（現 暗い）・悲し（現 悲しい） など

③ 形容動詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用して（＝単語の形が変わる）、単独で述語となる。

○状態・性質を表し、**言い切ると「なり」「たり」で終わる**。（口語（＝現代語）では「だ」で言い切るもの）

例 おろかなり（現 おろかだ）・あやしげなり（現 あやしげだ）・荒涼たり・騒然たり など

※単独で述語となることのできるこの三つ（動詞・形容詞・形容動詞）をまとめて、**用言**という。

④ 名詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用せず（＝単語の形が変わらない）、単独で主語となる。

○単独で主語となることのできる名詞のことを、**体言**という。（**名詞＝体言**）

例 児・僧・宵・かいもちひ・比叡・山・片方 など

⑤ 副詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用せず（＝単語の形が変わらない）、主語とならないで**用言を修飾する（＝説明する）**。

例 必ず、いと（＝とても）、なほ（＝やはり） など

⑥ 連体詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用せず（＝単語の形が変わらない）、主語とならないで**体言を修飾する（＝説明する）**。

例 あらゆる、ある、かかる（＝このような） など

⑦ 接続詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用せず（＝単語の形が変わらない）、主語とならないで接続する語。

例 されど（＝しかし）、さうば（＝それでは）、また（＝さらに） など

⑧ 感動詞…○自立語（＝その言葉だけで意味がわかる語＝文節になることができる語）である。

○活用せず（＝単語の形が変わらない）、接続しない語（＝独立語）

例 あな（＝ああ）、いざ（＝さあ） など

〈付属語〉

⑨助動詞…○付属語(「その言葉だけで意味がわからない語」「文節になることができない語」)である。

○活用して（Ⅱ単語の形が変わる）、用言その他について様々な意味を添える働きをする。

例 雨降る。(雨が降る)

↓雨降りけり。(雨が降った) 【助動詞「けり」は、過去(うだった)の意味を添えている】

↓雨降ら**ず**。(雨が降ら**ない**)【助動詞「ず」は、打消(くない)の意味を添えている】

↓雨降ら**む**。(雨が降る**だろう**)
【助動詞「む」は、推量(〜だろう)の意味を添えている】

※助動詞の一覧は、「完全マスター古典文法」の表紙の裏にまとめてあります。

⑩ 助詞…○付属語（Ⅱその言葉だけで意味がわからない語Ⅱ文節になることができない語）である。

○活用せず（＝単語の形が変わらない）、他の語について関係を示したり意味を添えたりする。

例 人「」見る…「」に入る助詞によって文の意味が違ってくる。

↓人【**が**】見る（人**が**見る）【助詞「が」は「人」が主語であることを示す】

↓人「**を**」見る（人**を**見る）【助詞「**を**」は人が動作の対象（見る対象）であることを示す】

↓人「**や**」見る（人が見る**か**）【助詞「**や**」は疑問の意味を添える】

☆今まで説明してきた品詞を表としてまとめたのが品詞分類表です。これまでの説明を参考にしながら、左の品詞分類表を完成させよう。（覚えるしかない）

品詞分類表

品詞分類表									
単語									
単独で文節をつくる ことができない 		単独で文節をつくる ことができる 							
する。 しない。		する。		しない。					
主語になることができる。		主語になることができる。		主語になることができない。				主語になることができる。	
終わる。 (で		わる。 (で終		終わる。 (段の音で		独立語になる。		接続語になる。	
用言を修飾する。		体言を修飾する。							

これまでの学習をふまえて、「完全マスター古典文法」の11ページ下の確認問題をやってみよう。また、「児のそら寝」の全文を単語に分けてみよう。(余力がある人は、単語に分けた後にそれぞれ単語の品詞を考えてみよう) 次回品詞分解した「児のそら寝」全文を掲載予定です。

例 今（名詞）は（助詞）昔（名詞）、比叡の山（名詞）に（助詞）児（名詞）あり（動詞）けり（助動詞）。